

プレスリリース

坂口 紀代美 展

ヴェネチア パラッツォ・ベンボにて
(ヨーロッパ・カルチュラル・センター ECC 主催)

会場

パラッツォ・ベンボ ルーム 16

展示タイトル

「魂を載せて舟はゆく」 坂口紀代美

会期

2026年5月9日(日) - 11月22日(日)

オープニング・プレオープン

5月7日(木) 5月8日(金) 5月9日(土)

オープン・プレオープンに**建畠哲先生(草間彌生美術館館長)**が来場予定です。
作品の感想を伺い、記録に残します。

最新情報 展示の最新情報は、SNSにて随時お知らせいたします。

坂口紀代美 プロフィール（彫刻家／日本）

坂口紀代美は、ドイツ、ルクセンブルク、東京を拠点に活動する日本の彫刻家である。作品は、ポートランド州立大学美術館（アメリカ）、ヴィルヘルム・レームブルック美術館（ドイツ）、デュッセルドルフ市など、主要な公共コレクションに収蔵されている。

2005年、日本政府海外研修制度の一環としてギンター・ユッカーのスタジオに参加。この経験は、その後のヨーロッパとの関わりに決定的な影響を与えた。

主な公共作品として、ユネスコ世界遺産に登録されているサンマリノ歴史地区に設置された大理石およびブロンズによる記念碑《Carving the History of Freedom》（2014年）等々多数。日本では、《Stone Stage》（練馬／東京）、大宮盆栽美術館をはじめ、《まだまだ》《これから》（巣鴨／東京などのモニュメント作品のほか、建築や公園空間に組み込まれた作品を多数手がけている。

坂口の制作において中心となるのは「場の感受」である。素材、場所、歴史のあいだに生まれる響き合いから形態が立ち上がる。近年は新たな素材にも取り組み、彫刻表現の領域を広げている。また、NHK Eテレ「戦争と芸術 ― クレー：失われた絵画」に出演。

坂口紀代美

メール kiyomi.sakaguchi@nifty.com

ホームページ <http://www.kiyomisakaguchi.com>



コンセプト — パラッツォ・ベンボ Room 16 (2026年) — 「魂を載せ舟はゆく」

パラッツォ・ベンボの Room 16 には、一つのテーブルが空間の中心に据えられている。その上には、鏡の破片、椀状の蠟のかたち、真鍮による枝状の要素が、意図的でありながらも抑制された不規則さのもとに配置されている。周囲の高い壁面には手漉き和紙に描かれた墨のドローイングが立ち上がり、下方のオブジェクトが描き出す流れは、上方の描線の浮遊する動きへと呼応し、拡張されていく。これらはひとつの揺らぐ知覚の場を形成している。

作家は、心が見えない営みに形を与えようとする。思考、反射、移ろいゆく印象——定着することのないそれら無形の存在は、手で形づくられた無数の蠟の要素として現れる。それぞれにわずかな差異を持つそれらは、鏡面の上を記憶の断片のように漂い、かすかなきらめきは、ささやきや、かすかに思い出される笑いの気配を想起させる。

光の移ろいや人の気配という静かな重力を受けながら、これらのかたちは次第に変容し、周囲に満ちる感情や歴史、見えない力を吸収していく。そしてやがて、ためらいながらも持続する「魂」のような響きを帯び、災害や暴力、矛盾に満ちた世界における、かすかな連続性を映し出す。

上方の真鍮の要素は断続的な雨を想起させる。それは歴史の降り積もりを示す比喩であり、断絶と記憶の循環を呼び起こす。下方では蠟のかたちが静かに動き続け、揺らぐ生の流れを航行しているかのようである。本インスタレーションは何かを断定するものではなく、ひとつの身振りとして提示される。すなわち、多様でありながら穏やかに持続する何かが、なおも浮かび続けている可能性を示唆するものである。

また本作《魂を載せて舟はゆく》は、パラッツォ・ベンボという場において、周囲の都市とも静かに呼応する。ヴェネチアの運河の揺らぎやラグーナの呼吸と共鳴し、建築の内と外が緩やかに溶け合っていく。その中で、訪れる人々の気配、移ろう光、遠くの水の動きが互いに響き合い、祈りや希望がゆっくりと満ちていくかのように立ち上がる。

また、小品《A little bit of loneliness killed me》も静かに展示されている。